



手書き文字の力

恩田陸

以前、富山の紙問屋をされている方と話したことがある。

彼いわく、「最も確実な記録方法は、和紙に墨。なぜなら、歴史がそれを証明しているから」。確かに、千年以上も前に書かれたものが今もきちんと鮮明に残っている。商家は火災の時に、大事な帳簿類を井戸に投げ込んだ、という話も聞く。それが可能なのも、丈夫な紙と消えない墨のおかげだ。

デジタルの記録媒体が日常生活に出来るようになってようやく三十年ほど。そのたった三十年のあいだだけでも、どれほどめまぐるしくハードウェアが変遷したことがか。

ワープロの初期の頃の大きなフロッピーディスクを覚えている人がどのくらいいるだろうか。次に小さなディスクが登場した時は、これで確定か、と思った

ら、意外にもその寿命は短かった。DVDだの、SDカードだの、USBメモリだの、めまぐるしく新たな媒体が現われた。しかも、それらに保存されたデータがどのくらい持つかは未知数だし、それらを読み出す機械がなければどうにもならない。挙句の果てには、データは「雲の上」に保管するという。

人が書いた文字というのは、それが書かれた紙もひっくり返して、ひじょうに豊かな情報を持つ。じっくり観察すれば、書いた時の状況や心理状態、内容に信憑性があるのか、胡散臭いのか、ということまで読み取れる。

私は小説家としてデビューしてからしばらくのあいだOLと兼業していたのだが、むろんほとんどの人にはそのことを隠していたので、専業作家になってからも、元の同僚は本当に私が作家なのか半信半疑だったらしい。

それがある時、書店の私の手書きのPOPカードを見て、「ああ、本当にNさん（私の本名）は作家だったんだと思いました」と言われたことがある。仕事でさんざん目にしてきた私の筆跡がそこにあったので、「本当に恩田陸はNさんなんだと実感した」そうだ。

筆跡というのはとても特徴があるので、みんな「これはあの人の字」「この筆跡は誰々さん」とよく覚えているものだ。私も、今も当時一緒に仕事をした仲間の字は鮮明に思い出せるし、その筆跡がその人となりを実によく表していると思う。

最近、父の遺品を整理していてじっくり日記や手帖、メモなどを眺める機会があった。私の字は父とよく似ているので、なんだか不思議な感じがした。父はもういないが、書いた文字は残っている。パソコンも残っているのだが、開いてみる気もしないし、ただのブラックボックスでよそよそしく、あれが遺品だとは思えない。

人が紙に文字を書くという行為はとても美しいと思う。文字が書かれた瞬間から、その紙は特別なものになる。文字の書かれた紙は愛おしく、簡単な一筆箋やふせんですら、文字が書かれた紙を捨てるのには抵抗がある。紙と文字は永遠に人間にとって最も重要なセットであり、人間の最良の部分の形にしたものなのだ。

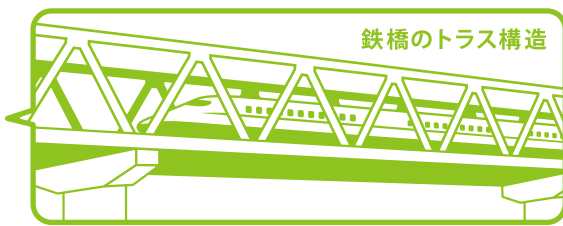
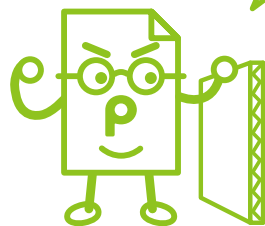


おんだ・りく●作家。仙台市出身。1992年、日本ファンタジーノベル大賞の最終候補作『六番目の小夜子』でデビュー。2005年『夜のピクニック』で吉川英治文学新人賞と本屋大賞を受賞。06年『ユージニア』で日本推理作家協会賞長編及び連作短編集部門を受賞。07年『中庭の出来事』で山本周五郎賞を受賞。17年には『蜜蜂と遠雷』で直木三十五賞および本屋大賞をダブル受賞。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

隙間だらけだから、段ボールは強い。

引越しや収納に便利な段ボール。紙でできているし、隙間があって一見頼りないのに、不思議と丈夫。実はこの隙間が丈夫な秘密なんです。「トラス構造」といって、タワーや鉄橋にも使われるほど頑丈な構造。おまけに、その隙間が衝撃も和らげてくれるんです。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

今回は10月1日号、岩井俊二さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo : Keiji Ishikawa